



源氏淺聞抄

元



昭和十二年七月一日正之
昭和十二年七月二日以宮内省圖書寮奉初丁及末丁校合了
兩者ハ全ク合ヒテモ也而シテ宮内省ハ古シキ本文モ精、良シ

正義記



光源氏の物語と紫式部筆佐也世人に傳へたる物語と
云つたこれらもふたつとも一なるものなり
と云ふは、これ物語の考略に詞の花福らぬ、筆は
一枝をけりてきりておれに、
六の葉は、
ちにあや、
れち、
すぬ、
氏、

浅草抄目録

- 一 きりつね
- 二 ちり木
- 三 空蟬
- 四 ぬるか
- 五 けいり
- 六 羊才
- 七 紅葉
- 八 花
- 九 須
- 十 あり
- 十一 才
- 十二 花
- 十三 松
- 十四 うす雲
- 十五 あさ
- 十六 乙女
- 十七 繪合

序四

きりつね

いづれの御時よりかきん女御更衣あまのつねに給け。
 中にはいづれかきん女御の御衣をあらはして時を
 給ふまきり 云々光原氏乃御母也これいづれつねに
 すゝねの巻のころ人れりのつねをたてて巻を桐壺
 と名づく太上天皇をまきりつねと名づくるみこ
 尊王子の宮にありまきりつねの一人とて大政大臣の臣下れり
 ちりきり位をりまきりつねの大臣右大臣内大臣侍上達刀
 と申す大将大納言中納言と上官の人も公卿と申す

しり申也殿上人より中將少將侍従并の君たちより下官の人
又せ房もあらはれまはさきより一代も一人おとすはす后も
降つて申文も申し女御も二位の人ありいさめも海も
これ位乃時より車より降り給三位の内侍典侍せんし
口位より更衣のみかよの御子より給へて御息も申し五位
令婦も申しこれ名も申し孫も花人これせ房乃ち申しいさめ
ちん取におとれ申しいさめ殿上にお扱一のみこ是朱雀院
右大臣の御おとめこも申し人の御も申し是を申しつた
是に申しけの君も申しりは申しせつされみも申し成給

きおと春文も申しけの君も申しの御も申しりは
女文二所は申し女二れ宮女この宮も申しの御も申し桐壺
衣乃ち申しに申しも申しひなも申しも申しなる玉れたのこ
むまれ給ぬも申しに申しは申し源氏の御も申しに申し
は申しりり同一年は申し母も申し衣も申しぬも申し心も
大内を申しも申しも申しの御も申しも申しかも申し
いさめ申しや申しりり人れ申しも申しや申しは申し
いさめ申しけも申しは申しら女の御も申しは申し御門
申しにも申しせんも申しも申し又入申しも申しは申し

水浸やはかりあつとけりつらん
たれもたかくはなまきい
こぞ契しそねけをちりとも
打すて我とあやむ
やな〜と文衣

かみりてわらもみちれぬ
いほり〜と命たりきり

あつとけりつらん
たれもたかくはなまきい
こぞ契しそねけをちりとも
打すて我とあやむ
やな〜と文衣

あつとけりつらん
たれもたかくはなまきい
こぞ契しそねけをちりとも
打すて我とあやむ
やな〜と文衣

よ木此〜と吹むすわねの音

小萩のつれなきをねむしき物やれ

神仗のしるしに海をくみまゝもよもひもあまのつれなきを
取らねど心ちて月けりりるゝをさしりく
さしきほ

二
同人のあはれもさしきほ

ハミミミミミミミミミミミミミミミミ

神仗のつれなきをねむしき物やれ

二
すしきほ

あはれもさしきほ

二
二

あはれもさしきほ

あはれもさしきほ

小の方合のつれなきをねむしき物やれ

二
あはれもさしきほ

あはれもさしきほ

あはれもさしきほ

あはれもさしきほ

あはれもさしきほ

あはれもさしきほ

かの文衣れ沖く〜の〜お〜おたを西〜のお
く物〜の〜沖門も〜お〜お〜お〜お〜お〜お
〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お

太上天皇

玉れあ〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る

かや〜れ〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お
〜枝を〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お
〜枝〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お
沖子〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お

ゆせ〜る〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お
〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お
詩〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お
か〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お
〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お
文衣れか〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お
香もあ〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お
か〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お〜お

しら玉れやみのつるきつらなほ

羞ふしらもほらちりき

きくくならうたふくはあはれきり 良厚がきり

雲のうらも後もくはなほ月

いくてすむくはちりやと

これやと取人なほふにひひるふふふふ
福もたらふかえの女房もえきき思ひ

あつ時あつのすまひにいかし

なほとる人ききかきき

と云んこつろ又七女より源氏もせきりひひるふふ

くくく中にひひる相人なるきききききききききき

宮を伝下れ子乃やうふてはうせきききき相人あま

たひひむもて帝とれきき位よあうきききききき

はすもちのひひるみほらきききききききききき

くくくくわあんもくくくくくく光君もあつ

中せし七歳より又ひひるて此へ傳人子詩をききり

うらひひるひひるひひるも雲力をひひかきききき

君をみききききききかきききききききききき

経く七歳より涼氏の姓を経てあへんなる如十二を押え服
せいでやうてんのひんくさいくいてこれとあつ推しの秋
た大臣れいまを押るひぬくあつてた大臣乃さよ涼氏
いてた大臣れいの方た上天皇の西ひうくくこれ押い
るしきうけの押かあつ推ひいれこれ大臣いんけ
まあうくから引入り大臣す武家のえあつたやと同
くし押門左大臣を推せしめしはしるる如く
押ういふれいもあつて

大上り
いけちんてんてんてんてんてん

契く心きむもひくあはし
大大臣
張ひく心もふんてんてんてん

あつていんてんてんてんてんてんてんてんてん
あつての君らあひりまかこれいんてんてんてんてん
まひんてんてんてんてんてんてんてんてんてん
あつていんてんてんてんてんてんてんてんてん
あつていんてんてんてんてんてんてんてんてん
あつていんてんてんてんてんてんてんてんてん
あつていんてんてんてんてんてんてんてんてん

申將女の是無志をばなほはしきまはしきかきしめあり
る大いれをうつけてみよふ身いこふまもも家もたはら
たはらんもねらふ申も思はれおひちりてはたはれな
あはちろひりてあはておひちりてはたはれぬ
な多様無きかきしきもはたはれぬあはみり
るのたはれぬもたはれぬはたはれぬはたはれぬ
ろひてゆぬひくはたはれぬはたはれぬはたはれぬ
ぬもあはちらんも思はれぬはたはれぬはたはれぬ
式部せしむるはたはれぬはたはれぬはたはれぬ

申將侍して世申る女房はよもやあはれをば上申下
とぶらつらるるをばあはれをばあはれをばあはれ
とととととととととととととととととととととと
免あはれをばあはれをばあはれをばあはれをば
あはれをばあはれをばあはれをばあはれをば
らりひりひりひりひりひりひりひりひりひりひり
申はれぬはたはれぬはたはれぬはたはれぬはたはれ
のあはれをばあはれをばあはれをばあはれをば
木れみちのしりあはれをばあはれをばあはれをば

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in a fluid, connected style across approximately 12 lines.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a fluid, connected style across approximately 12 lines.

されし物にこそはすけりてはこゝろをたもたぬ
 しるしめたりてあはれもなかるや七夕はもろくもたは
 へし又物を隣のはつきりの立多姫れ山乃
 錦もなほちかきもはくも物福もなほくはくして
 るしりりし物もはくもなほくもなほくもなほく
 ちもなほくもなほくもなほくもなほくもなほく
 のしりりし物もなほくもなほくもなほくもなほく
 ねしりりし物もなほくもなほくもなほくもなほく

¹⁰⁰⁰
 ちもなほくもなほくもなほくもなほくもなほく

先ひかりかゝるもはくもなほくもなほくもなほく
 ちもなほくもなほくもなほくもなほくもなほく
 のしりりし物もなほくもなほくもなほくもなほく
 ねしりりし物もなほくもなほくもなほくもなほく

川もなほくもなほくもなほくもなほくもなほく
 つふひもなほくもなほくもなほくもなほくもなほく
 のしりりし物もなほくもなほくもなほくもなほく
 ねしりりし物もなほくもなほくもなほくもなほく

流るる水とてわが心もあはれしに
神も月もほろひ月のたよりなきあはれ殿上人とて
車にのりて内より海へ伊つたに上人しけりといふ
人まゝ思ふはかたしとてかゝる世なるもよきぬ
見ちかきもはれとちかきもはれと池の水もよき
月もあすの信家をかすきぬとてはれにてたけぬの
殿上人もたけぬとてはれとて又たかたか
上人心もあはれとてはれとてはれとてはれとて
けりてはれとてはれとてはれとてはれとてはれとて

詞多ゆゑもはれとてはれとてはれとてはれとて
とてはれとてはれとてはれとてはれとてはれとて
ひもはれとてはれとてはれとてはれとてはれとて
あはれとてはれとてはれとてはれとてはれとて
きふあはれとてはれとてはれとてはれとてはれとて
女うちより琴をかきぬとてはれとてはれとてはれとて
印着はれとてはれとてはれとてはれとてはれとて
^{ひか}好らまゝぬ印着はれとてはれとてはれとて
みくらぬとてはれとてはれとてはれとてはれとて

さしつかへなく人となすべし

反上人

翠々たるも月も見えなぬやう

流れるも人をもいさやとあけ

都いさよ流るいさよ

女

木ししよ吹あすちの節を

川さよくま

とちりゆらたかき流るるさよ
女のもくゆさよちのまらぬ
流るあすふふふ女乃ゆ

君さよのすんさよあさよゆら
さんさよゆらさよあさよゆら
さよゆらさよゆらさよゆら
たよゆらさよゆらさよゆら
かさよ名たもさよゆらさよゆら
源氏もかゆらさよゆらさよゆら
あんさよゆらさよゆらさよゆら
さよゆらさよゆらさよゆら
さよゆらさよゆらさよゆら
さよゆらさよゆらさよゆら

以中將たるふしとさちあむしんらんあひていんあ
 しくんあひていんあむしんらんあひていんあ
 くにあひていんあむしんらんあひていんあ
 くれ女のあひていんあむしんらんあひていんあ
 ういりあひていんあむしんらんあひていんあ
 あひていんあむしんらんあひていんあ
 さん後にあひていんあむしんらんあひていんあ
 きんは福にあひていんあむしんらんあひていんあ
 う以中將たりとれ小の方と右大臣にこれ君とよせられた

りた人たるうのふらうあひていんあむしんらんあひていんあ
 なるあひていんあむしんらんあひていんあ
 中將兵た格にあひていんあむしんらんあひていんあ
 くに女むしんらんあひていんあむしんらんあひていんあ

上りあひていんあむしんらんあひていんあ
 花

りあひていんあむしんらんあひていんあ
 らあひていんあむしんらんあひていんあ
 ぶみあひていんあむしんらんあひていんあ

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in a fluid, connected style across approximately 12 lines.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. It includes a small asterisk-like symbol at the top left of the main text block. The text is written in a fluid, connected style across approximately 10 lines.

文下
~~~~~

はすしたたるく  
くおくらみちちを  
阿ふ寸扱もたし  
海もなかりあ  
にれ女唐のお  
を  
る  
降

す  
入  
ま  
あ  
さ  
あ  
あ  
ぬ

女  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~

~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

保氏

~~~~~  
~~~~~

~~~~~

引

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~





Handwritten text in a cursive script, consisting of several lines of approximately 15-20 characters each.

Handwritten text, possibly a section header or a specific phrase, including a character that resembles '留' (stop or stay).

留氏

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page, consisting of several lines of approximately 15-20 characters each.

Handwritten text in a cursive script, likely a table of contents, listing various items or chapters in approximately 10-12 lines.







よしつたふりばさるもいへしむし

くたふりばさるもいへしむし

くたふりばさるもいへしむし

くたふりばさるもいへしむし

くたふりばさるもいへしむし

くたふりばさるもいへしむし

くたふりばさるもいへしむし

くたふりばさるもいへしむし

くたふりばさるもいへしむし

くたふりばさるもいへしむし

くたふりばさるもいへしむし

くたふりばさるもいへしむし

くたふりばさるもいへしむし

くたふりばさるもいへしむし

くたふりばさるもいへしむし

くたふりばさるもいへしむし

くたふりばさるもいへしむし

くたふりばさるもいへしむし



一ノ月十日に於て...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...

原句

...  
 ...

...

廿

...

...

廿九

...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...

...









たるものありけり  
 いたるにあらざりけり  
 のくはみしそらに  
 うらなひしむらに  
 せすやみあふひに  
 らくるもはつらき  
 うらなひしむらに  
 念佛の信もなきは  
 らくるもはつらき

ちるものありけり  
 いたるにあらざりけり  
 のくはみしそらに  
 うらなひしむらに  
 せすやみあふひに  
 らくるもはつらき  
 うらなひしむらに  
 念佛の信もなきは  
 らくるもはつらき





こゝにほりー ぬとそりたるやふる せ秋つけて  
ほりほりあゝ

石のふも 朝陽かたきをむすまひ

あはれがしをむすまひ

女まひー せりゆれかたきー せりゆれかたきー

るれあひくせよ せりゆれかたきー

たふりー せりゆれかたきー

こゝにほりー ぬとそりたるやふる せ秋つけて  
ほりほりあゝ

こゝにほりー ぬとそりたるやふる せ秋つけて  
ほりほりあゝ

あはれがしをむすまひ

あはれがしをむすまひ

あはれがしをむすまひ

あはれがしをむすまひ

あはれがしをむすまひ

あはれがしをむすまひ

あはれがしをむすまひ

あはれがしをむすまひ

ひしすはつちうきほくれ

重 蝉れおもしろき夏夜

みづあそびのたのしみ

けりみづのうらみはなほあつちうきほくれ  
のち中へくもたまたまあつちうきほくれ

源氏 けりみづのうらみはなほあつちうきほくれ

ちうきほくれのたのしみ

三つうらみ

源氏 けりみづのうらみはなほあつちうきほくれ

おもしろいあつちうきほくれ

ちうきほくれのたのしみ

けりみづのうらみはなほあつちうきほくれ

えりみづのうらみはなほあつちうきほくれ

おもしろいあつちうきほくれ

けりみづのうらみはなほあつちうきほくれ

おもしろいあつちうきほくれ

岩の中へくもたまたまあつちうきほくれ

ちうきほくれのたのしみ

一、  
二、  
三、  
四、  
五、  
六、  
七、  
八、  
九、  
十、  
十一、  
十二、  
十三、  
十四、  
十五、  
十六、  
十七、  
十八、  
十九、  
二十、  
二十一、  
二十二、  
二十三、  
二十四、  
二十五、  
二十六、  
二十七、  
二十八、  
二十九、  
三十、  
三十一、  
三十二、  
三十三、  
三十四、  
三十五、  
三十六、  
三十七、  
三十八、  
三十九、  
四十、  
四十一、  
四十二、  
四十三、  
四十四、  
四十五、  
四十六、  
四十七、  
四十八、  
四十九、  
五十、  
五十一、  
五十二、  
五十三、  
五十四、  
五十五、  
五十六、  
五十七、  
五十八、  
五十九、  
六十、  
六十一、  
六十二、  
六十三、  
六十四、  
六十五、  
六十六、  
六十七、  
六十八、  
六十九、  
七十、  
七十一、  
七十二、  
七十三、  
七十四、  
七十五、  
七十六、  
七十七、  
七十八、  
七十九、  
八十、  
八十一、  
八十二、  
八十三、  
八十四、  
八十五、  
八十六、  
八十七、  
八十八、  
八十九、  
九十、  
九十一、  
九十二、  
九十三、  
九十四、  
九十五、  
九十六、  
九十七、  
九十八、  
九十九、  
一百、

一、  
二、  
三、  
四、  
五、  
六、  
七、  
八、  
九、  
十、  
十一、  
十二、  
十三、  
十四、  
十五、  
十六、  
十七、  
十八、  
十九、  
二十、  
二十一、  
二十二、  
二十三、  
二十四、  
二十五、  
二十六、  
二十七、  
二十八、  
二十九、  
三十、  
三十一、  
三十二、  
三十三、  
三十四、  
三十五、  
三十六、  
三十七、  
三十八、  
三十九、  
四十、  
四十一、  
四十二、  
四十三、  
四十四、  
四十五、  
四十六、  
四十七、  
四十八、  
四十九、  
五十、  
五十一、  
五十二、  
五十三、  
五十四、  
五十五、  
五十六、  
五十七、  
五十八、  
五十九、  
六十、  
六十一、  
六十二、  
六十三、  
六十四、  
六十五、  
六十六、  
六十七、  
六十八、  
六十九、  
七十、  
七十一、  
七十二、  
七十三、  
七十四、  
七十五、  
七十六、  
七十七、  
七十八、  
七十九、  
八十、  
八十一、  
八十二、  
八十三、  
八十四、  
八十五、  
八十六、  
八十七、  
八十八、  
八十九、  
九十、  
九十一、  
九十二、  
九十三、  
九十四、  
九十五、  
九十六、  
九十七、  
九十八、  
九十九、  
一百、

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is arranged in several lines, starting from the top right and moving downwards. The script is highly stylized and difficult to decipher without a key.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is arranged in several lines, starting from the top right and moving downwards. The script is highly stylized and difficult to decipher without a key.

いしやうは... 僧部乃指し源氏を... 尼は... 老れし房風...

源氏

尼

初善れり... 孫の神... 枕を... 山...

法比智瀧の...

源氏

吹海... 山ありし...

源もよ... 侍部... 侍... 侍... 侍...

侍部

侍... 侍... 侍... 侍... 侍... 侍... 侍... 侍... 侍... 侍...

侍部

~~~~~

たこ海~~~~~

~~~~~の~~~~~

~~~~~花の~~~~~

~~~~~海~~~~~

~~~~~子~~~~~

~~~~~國~~~~~

~~~~~葉~~~~~

~~~~~

源氏

夕海~~~~~

~~~~~花の~~~~~

尾

~~~~~花の~~~~~

~~~~~

~~~~~殿上~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~





神代前代の式々の言は神はあまの御尊の御  
つねに神の御言はまはるるにまはるるにまはるるに  
まはるるにまはるるにまはるるに

保氏

清・香山の御言はまはるるに

あまの御尊の御言はまはるるに

小山は尼君の御言はまはるるに  
あまの御尊の御言はまはるるに  
あまの御尊の御言はまはるるに  
あまの御尊の御言はまはるるに

尼公

あまの御尊の御言はまはるるに

あまの御尊の御言はまはるるに

神代前代の式々の言は神はあまの御尊の御  
つねに神の御言はまはるるにまはるるに  
まはるるにまはるるにまはるるに  
まはるるにまはるるにまはるるに  
まはるるにまはるるにまはるるに  
まはるるにまはるるにまはるるに  
まはるるにまはるるにまはるるに  
まはるるにまはるるにまはるるに

すゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝ

源氏

みゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

かゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

源氏

かゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

たゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

かゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

れん公 京 礼 御 家 へ せ ぬ け ち 光 光 源 氏 迄 ち ち ち ち ち

ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

ちりひらりゆきやぬきさきしるすかき

まつりのきりぎりすせんせんとおすてな

保氏

あまのついでに

社のかよひきりぎりす

こゝろをきりぎりすとも名づく

紫は

あまのついでに

こゝろをきりぎりすとも名づく

かきりぎりすとも名づく

あまのついでに

あまのついでに

少輔は君とて世宗の上は御め

保氏

あまのついでに

あまのついでに

うせあれはついでに夜を保氏紫は

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

新くしきあはれしはなれはなれ  
かみあはれしはなれはなれ

西より下流のり

しきあはれしはなれはなれ

あはれしはなれはなれ

神はなれしはなれはなれ  
あはれしはなれはなれ  
あはれしはなれはなれ  
あはれしはなれはなれ  
あはれしはなれはなれ

源氏

新くしきあはれしはなれはなれ

あはれしはなれはなれ

君もろしきあはれしはなれはなれ

あはれしはなれはなれ

あはれしはなれはなれ

あはれしはなれはなれ

あはれしはなれはなれ

あはれしはなれはなれ

あはれしはなれはなれ

うゝたふしとてはもみきりなむらしたく神の御言を  
 ながめしめたまふ。大捕は命賜ふ大因をなすかこもまほ  
 古のよきしむらたつ丁徳と申すけほひはもすめりえとつ  
 りとあふんおのゝまらしきんひの器をなすりくかき  
 こせし源氏との友とてならしむるの道よおほく三の女三の  
 一種は君臣の心通ひあひあひあひあひあひあひあひあひ  
 正徳にほくうしとてははくはくはくはくはくはくはくはく  
 文れしらするにたゞはくはくはくはくはくはくはくはく  
 从中将を大由より源氏をさしおとすはくはくはくはくはく

入給へらむしひまきしきしつ神に

双中

もろしめはに大由すまはくはくはくはくはくはくはくはく

源氏

いほくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく

はくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく

入られしむらたつ新のへりおのゝ

なれよとてこれおほくしひたりはくはくはくはくはくはくはくはく

いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

これかのをたしむるたしむるたしむるたしむるたしむるたしむる

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~


か〜夜君は心方法しき〜
 か〜夜君は心方法しき〜
 源氏いよはま〜
 みる〜
 下宿つゝ花を袖のぬききん
 こは并より〜
 紅れひと〜
 ひ〜

御ふ〜
 か〜
 又日紫れ姫君は〜
 又〜
 けふ〜

源氏平仲のきりかゝりては、
ありあけぬか平仲のきりかゝりては、
とてみりては、
ぬりては、
入ぬ平仲のきりかゝりては、
とて平仲のきりかゝりては、

あふこころのきりかゝりては、
人よきしきりかゝりては、

かゝりては、

とてみりては、

いれ花のきりかゝりては、

いれ花のきりかゝりては、

口紅葉賀

神は、
行幸ありては、
舞を、
あふこころのきりかゝりては、
いれ花のきりかゝりては、

津之玉のふしれははは

かゝぬ身はあからきり

みしらすはちかき人かゝらば舞はくもよき
れきさゆ鏡して源氏れあめくおとあしとせむせむお鏡
まろくちりいれおとせむしり中將のさるふ
よしたるさるさるの事さあさるさるのさ
あせふせんさるさるさるさるさるさるの
海はよふ由はひささるさるさるさるさる
さるさるさるさるさるさるさるさるさる

ふさり源氏もさるさるさるさるさるさる
由はよふさるさるさるさるさるさる

あはぬ人さるさるさるさる

さるさるさるさるさるさるさる

人さるさるさるさるさるさるさる

さるさるさるさるさるさるさる

さるさるさるさるさるさるさるさる
さるさるさるさるさるさるさるさる
さるさるさるさるさるさるさるさる
さるさるさるさるさるさるさるさる

あつたれすれはえしつゆをきくつて厚風はうろみま
かうれ中將をたりにけき秘をひやぬさくたみよ
せてたかぬききりせもいりしつて候ききいあつ思ひ
ふきすうらうらふ保氏を中將とせんつておはかほりぬぬ
たかぬききあひふさうらて保氏いしはしぬ中將をこ
ろひてわひぬあひいふたきと中將の志やうしねぬせん
うしぬあぬききすまおはるこあひたれ
ん
はひぬる名やういせんひきう
かへらあは中れぬぬら

保氏
かされるさおと保く豊衣
きいばらうすま心とらみぬ
とぬれしなすすたにふあていぬひぬあひさ
かひめて人あからすあはれまふ又のたためぬのみならた
ちとあし中將れぬあつて保氏のほくしとまう
田代
うしむともしふさるぬあらかし
保氏
しきくかし波の名妙
あしとら波をあらはし
うせきはいらさうし

板中將のりしを源氏乃御おびきくまつくはらふ
ふ又申おのたひをたくはらふこれおひきまはけらば
まへにけおひきまは

源氏

申候かきやおあもちかした
しあひのおひきまはけらば
君よかきまはらぬおひきまは
からまはらぬ申まはらぬ

いかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに
あひまはらぬいかにいかにいかにいかにいかにいかに

うまうまうま心まはらう又これまのすはらぬいかにいかに
女御まはらぬまはらぬいかにいかにいかにいかにいかに
これ御まはらぬ

源氏

いかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに
雲あふくまはらぬいかにいかに

み花れえん

きりしにのりしあまの御門南殿に候のえんせまはらぬ
まはらぬいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに
これまはらぬいかにいかにいかにいかにいかにいかに
いかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに

しる名のうきまといふはまはしるははしる

おろり

うきまをうきまをうきまをうきまをうきまを

うきまをうきまをうきまをうきまをうきまを

原氏

いほれろとあはれをうきまをうきまを

うきまをうきまをうきまをうきまをうきまを

あまのうきまをうきまをうきまをうきまをうきまを
うきまをうきまをうきまをうきまをうきまを
うきまの君もおろり月夜乃君もうきまをうきまを
かきつけたうきまを

世よあまの心ちしるすはまのうきま

月のりあをうきまをうきまをうきまを

いふしてあまの心ちしるすはまのうきま
あまのうきまをうきまをうきまをうきまをうきまを
おろりにあはれ花のえんあまのうきまをうきまをうきまを

右大臣

あまのうきまをうきまをうきまをうきまをうきまを

あまのうきまをうきまをうきまをうきまをうきまを

あまのうきまをうきまをうきまをうきまをうきまを
あまのうきまをうきまをうきまをうきまをうきまを
あまのうきまをうきまをうきまをうきまをうきまを

つらう入るの山へ海へ

ふの月れくやる

心入るれはへえ悪くぬる

心入るる海へ

月るきやへ海へ

こりかぢあへれあう嬉しき

六あめ

大上天皇御位を春宮ふゆつ^{朱雀}とせ給ふまじり
の世御位心乃まゝあてこれ御代も成てまはる

これ春より大后れ宮^{冷泉}に友童れけり宮春ふ

給ふれ御^{源氏}にすけり御代も成てまはる

たう御まきと一條の御守所の御^{源氏}にすけり

この巻より伊勢れ御^{源氏}にすけり

源氏の御い^{源氏}にすけり

たまたもれまう^{源氏}にすけり

はら^{源氏}にすけり

まじり^{源氏}にすけり

御^{源氏}にすけり

はくまのつらぬきこれ大將を足とくまのつらぬきとて
より物見車とて心よりおしりてんかきまのつらぬき
はく守又おふり人も遠くまのつらぬきとて
これよりくまのつらぬき大將のおしりてんかきまのつらぬき
大將乃姫君も多しあつ成程と御心なくまのつらぬきとて
御車とて救へりてはくまのつらぬきかひ源氏れ思ひてかひはくま
六条れのおしりてんかきまのつらぬきおしりてんかきまのつらぬき
まのつらぬき大將乃姫君れ御車とてやうつけてくまのつらぬきおしりてんかきま
人おしりてんかきまのつらぬきおしりてんかきまのつらぬき又あつ令

かつくまのつらぬきおしりてんかきまのつらぬき
口おしりてんかきまのつらぬきおしりてんかきまのつらぬき
いと源氏れおしりてんかきまのつらぬきおしりてんかきまのつらぬき
たよあつおしりてんかきまのつらぬきおしりてんかきまのつらぬき
くまのつらぬきおしりてんかきまのつらぬき

かけおしりてんかきまのつらぬきおしりてんかきまのつらぬき
おしりてんかきまのつらぬきおしりてんかきまのつらぬき

これおしりてんかきまのつらぬきおしりてんかきまのつらぬき
おしりてんかきまのつらぬきおしりてんかきまのつらぬき

あゝいふも源氏中人ありまきふかふにあつてな
すまをちたふれは心ふさげすいおしておとすもは
くれおの志りさありと源氏ハ石んの中もさる中源り又乃
日兵かものまつりあれとけふは引大將を紫れ上を御車にのせて
おんふしてち新紫れ御り源氏出まひつりまきおとちいふたは
源氏
そかうたもさちいられりかみまきの
おひゆくす清ら家のいづみん
ちいらともいへるまらんちいあ
んちひひるれのとけうあ

おほれとて源氏と車れすれもちけおぬをのいあひ
くも人語を覚し心つす人ねあしめく車ちりひ
けふ又かちあゝいふまよる車より人まよせて
源氏れ御車あゝいふとて世にちいふすおた
ん源氏ハねめて引まてをな廟れつまをたして
中
まふや人乃さをはらあひし
神れゆい乃けあはま
これをもたれしつれまうれ奉福ひし源氏得ますけ
あまうかもしはあし神とにくたれて

氏

かぢきふ心うあはたにもえぬも

ハナ氏人まゝしてらあひを

うらめし〜うひま〜として

源内侍

くわ〜くもか〜き〜ふらふら

人ふれちたはまぢかえ〜

是を紫れ〜とおのしほあ〜い〜
る〜く〜けれ〜あ〜い〜あ〜い〜
是と名つ〜やま〜お〜お〜
く〜伊勢〜〜〜

御心もう〜ら〜ら〜
もつ〜い〜山の上〜
あ〜ら〜あ〜
もか〜乃〜
うせ〜
あす〜

川内

あ〜あ〜あ〜

あ〜あ〜あ〜

あ〜あ〜あ〜

うきうきとあめあめと夜もたなほれ
暁もあけぬとていひてはなほ
しつかけきとていひてはなほ

^{なす} 神あやむとていひてはなほ

おぼろけとていひてはなほ

^氏 いらんやんやんたつとていひてはなほ

なすとていひてはなほ

沖んきいまはなほ
源氏もいひてはなほ

歌のいへるにたつとていひてはなほ

なすとていひてはなほ

かやうにもれ乃けらしてはなほ
こかたにこそとていひてはなほ
くはなほとていひてはなほ
いてはなほとていひてはなほ
あはなほとていひてはなほ
はなほとていひてはなほ
あはなほとていひてはなほ

申しりふさうね八月廿日に寝たて
まつさしめ御心よ源氏をいひてはほむら室の
ふりかへて

此氏なりぬ煙りさへれらるる
なす雲われ何れもは

源氏もにさるさるをわらむことありまゝと女君
さへさうはなまとおもすもあはれあり
かきりいられさうすす夜あはれ

後へ神を倒さるは

可もあはれさけは

時も何れ秋や人よ

よふんこあはれいしゆあはれ
いれあはれいしゆあはれ
いしゆあはれいしゆあはれ
つるつる
ますのていこ

人のよふあはれさけもあけきた
おくも神をさへは

はれあふの御さあはれ

あつたはれし...
らんやと

り...
お...
物...
...

正四十九日...
...

ち...
...

瓦冷霜花...
華翠衾冷

あ...
君...
...

かへて田舎にいらしては、まことに静かであらう。きこくは
かへて田舎にいらしては、まことに静かであらう。きこくは
かへて田舎にいらしては、まことに静かであらう。きこくは
かへて田舎にいらしては、まことに静かであらう。きこくは
かへて田舎にいらしては、まことに静かであらう。きこくは
かへて田舎にいらしては、まことに静かであらう。きこくは
かへて田舎にいらしては、まことに静かであらう。きこくは
かへて田舎にいらしては、まことに静かであらう。きこくは
かへて田舎にいらしては、まことに静かであらう。きこくは
かへて田舎にいらしては、まことに静かであらう。きこくは

あやふし

